

第 597 回：レポートを書く前に確認したいこと（MI）

こんにちは。今回は、レポートを実際書き始める前に必ず確認したい、レポートを書く際のルールについてお話します。

学術的な文章を書く際のルールは少なくありません。例えば、直接・間接引用の方法、孫引きの禁止、参考文献の書き方、さらにはフォントや文字サイズの指定等があります。しかし、慣れてしまえばなんてことはありません。ですが、大学に入学して初めて取り組むレポートであったり、レポートを書く機会があまりなく、いつの間にか目の前に卒論が待ち構えている状況であったりすれば、これらのルールは難しいように感じられるかもしれません。これらのルールがままならないままレポートを書き始めると後から苦労するので、ここではレポートの本文を書き始める前に抑えたいポイントを確認しましょう。

まず初めに、自分にとってわかりやすく参考になる執筆ルールが書かれた資料を見つけ、印刷等して手元に置き、常に確認できるようにします。図書館にはレポート・論文の執筆に関する資料が多く所蔵されています。試しに数冊読んでみて、自分に合うものを見つけましょう。さらにインターネットで検索すれば、他大学で作成されたレポートの書き方ガイドラインなど、便利なものがヒットします。参考文献の書き方等、学術分野などにより異なるルールもあるので、自分のレポートと同じ分野を扱っている資料だと安心です。しかし、こういったガイドラインは例文や文章の一部のみを載せている場合もあるので、ここではあくまでも基礎的な「型」を参考にします。

では次に、実際の論文や書籍でどのように

「型」が用いられているのかを見てみましょう。論文は決まった構成で成り立っていて、冒頭では必ず先行研究について触れられています。ここでは直接・間接引用の方法を確認することができます。この二つの引用方法の違いや引用先の著者の書き方、ページ数の表記方法もチェックします。また、注釈で引用先を載せている場合もあるので、あわせて確認します。

レポート本文も重要ですが、参考文献も同様に重要です。論文や書籍の最後に記載されている参考文献一覧もチェックします。参考文献一覧に書く内容はどの分野でも共通していますが、書き方は分野により異なります。ですので、自分がレポートを書く際に参考にする論文等の参考文献一覧の書き方を見るのがお得です。ただし、インターネット上の記事の引用等は古い資料には無いため、比較的新しい資料も参考にしましょう。

このように、レポートを書く際のルールはいくつもありますが、それらの用いられ方も、同様にいくつもの資料で確認することができます。書き方やルールを自分自身で作り出す必要はなく、これまでに積み重ねられてきた膨大な研究の「型」を参考にすれば何も問題はありません。初めは慣れないかもしれませんが、小学校でのひらがなや漢字の授業を思い出し、焦らずにコツコツとやってみてくださいね。